

エコデザインを体現する サステナブルの伝道者



株式会社オープンハウスの代表取締役の益田文和氏。日本のエコデザインの先駆者として持続可能な社会の実現を目指し、日々活動を続ける益田氏を紹介する。

エコデザインとの出会い 廃棄される膨大な資源

もともとインダストリアルデザインを専攻し、建設会社、デザインオフィスを経て、フリーのインダストリアルデザイナーとして家電製品やオーディオ機器などさまざまな工業製品のデザインに関わってきました。国内大手家電メーカー各社、自動車メーカー、家具メーカーをはじめ主要な分野の工業製品の開発に関わってきました。海外では、アップルのマッキントッシュのデザインで知られたドイツのフロッグデザイン

でデザインディレクターをしていた時期もあります。

しかし、あるとき京都の嵐山あたりを散策していたら、河原に粗大ごみが捨ててありました。50 m手前までくると、僕がデザインしたものだとかかったんです。そのモデルは何万台も作られていたはずですが何年後かには皆捨てられる運命にあるというところに改めて気づくと、自分を含めてデザイナーは自分達が無自覚的に消費している資源とそれが地球の環境に与える影響に責任があるのではないかという危機感を抱くようになり、1989年頃から環境問題についての研究を始めました。

変わっていく世界 変わらない社会

エコデザインという概念が確立さ

ことは、さらに悲劇的なものでした。

エコカー、エコ家電など日本のエコデザインを取り入れた製品は一樣に成功しています。しかしながら、トータルで見ると、二酸化炭素の排出量が増加し、環境負荷の軽減につながっていないことがわかったのです。

その理由は、それを買う側に立てば理解できます。例えば、冷蔵庫では、消費電力が少ない省エネ商品だといわれると、これまでよりも容量の大きい冷蔵庫を購入します。それは、同時に冷蔵庫にたくさん物が入るものだから、食料品も今まで以上に購入するようになり、エアコンもこれまでに一台でしたが、今では一部屋に一台という状況になっています。

市場がエコデザインされたもので満たされ、マーケティング上では成功

を収め、イノベーションを起こしていましたが、逆に社会の環境負荷を増やしている状況に陥っていたのです。

そうした現実に対する警鐘を鳴らす意味もあつて、2006年にサステナブルデザイン国際会議を開きました。この課題を解決するには、圧倒的な技術のイノベーションとともに、社会のイノベーションを起こさないと結局、変わらない。すると、議論すべき内容が一気に社会科学や経済から思想、哲学、宗教にまで飛躍していきました。初回は、社会学者や都市工学者など専門家を世界から集め、サステナブルな社会というフレーム作りに取り組みました。2年目では、ビジョンを明確にするため、サステナブル社会はどういう社会なのかという絵を描きました。

れたにもかかわらず、日本はとても

腰が重たかった。いくら提案しても役所も企業も相手にしてくれませんでした。そんな中、95年に京都の法然院というお寺でエコデザインのワークショップ「天然デザイン」を主催し、その翌年に東京で天然デザイン展も開催しました。

そうこうするうちに、97年頃から、政府も動き出し99年に通産省の支援を得てエコプロダクツ展の開催に至りました。その年、東京大学工学部の山本良一教授(当時)と一緒にダイヤモンド社から『エコデザイン』という本を出版しました。デザイナーにエコデザインを働きかけてもなかなか手ごたえがなく、いまだに苦労しています。

メーカーなどは作り手として製品に物的な責任を負います。デザイナーは自発的に責任を認めない限り、指摘されない立場にあるとしても理解あるエンジンニアと一緒にエコデザインに取り組むべきだと思います。

サステナブルデザイン国際会議 持続可能な社会作りへ

環境に配慮した製品を作っているときさまざまなプロジェクトに関わってきましたが、2005年に気づいた

これを北海道の洞爺湖サミットの直前に当時、首相だった福田康夫総理に渡しました。2011年の5回目の時には、ヨーロッパのミラノ工科大学のエツイオ・マンズイニ教授を招待し、インフラは故障することを前提にして考えるべきだという話をしていただき、原発の危険性を説いていただきました。その彼がちょうダイタリアに帰国した途端、東日本大震災が発生しました。

次代へ引き継ぐもの

サステナブルの本当の意味

3・11をきっかけにして、完全に目が覚めました。なんかおかしいという感覚から、絶対におかしいと確信しました。実際に日本は、とんでもなく貧しい国です。日本列島の7割が森林で豊富

■ますだ ふみかず プロフィール

略歴

デザインコンサルタント
1949年東京都出身、1973年東京造形大学デザイン学科卒業後、建設会社、デザインオフィスを経て、1978年以降フリーのインダストリアルデザイナーとして家電をはじめとする様々な製品のデザイン開発や地域産業のデザイン振興など国内外のプロジェクトに関わる。
1991年株式会社オープンハウス設立(代表取締役)、2006年LLPエコデザイン研究所開設(所長)、2000年より東京造形大学デザイン学科教授。研究専門領域はインダストリアルデザイン及びサステナブルプロジェクト。
日本デザイン振興会理事、サステナブルデザイン国際会議実行委員長、ソーシャル・サステナブルデザインの国際連携プロジェクトDESIS のTZU DESIS Lab.の代表などを務める。
日本デザイン学会、日本デザインコンサルタント協会会員。

著書

「戦略環境経営/エコデザイン ベストプラクティス100」(共著/ダイヤモンド社)、エコデザイン(共著/東大出版会)など。コムジン(web magazine by NTTコムウェア)に「日本デザイン探訪」を連載中。

www.openhouse.co.jp www.zokei.ac.jp
http://www.nttcom.co.jp/comzine/new/jdesign/index.html
http://www.desis-network.org/
2013.07.01現在

Career Summary

Design Consultant
Born in Tokyo, 1949. Graduated from the Tokyo Zokei University Department of Design in 1973.
Worked at construction companies and design offices, eventually becoming a freelance industrial designer in 1978, designing/developing various products, such as household appliances, and promoting designs for local industries in Japan and overseas.
In 1991, established open house inc. and sat as president. In 2006, sat as head director of LLP Eco Design Institute, and has worked as a professor at the Tokyo Zokei University Department of Design since 2000, specializing in industrial design and sustainable projects.
Has also worked as Executive Director for the Japan Institute of Design Promotion, Executive Committee Chairperson for the International Conference of Design for Sustainability, and as TZU DESIS Lab. representative for the DESIS International Collaboration Project for Social Sustainable Design.
Is an active member of the Japanese Society for the Science of Design and Japan Design Consultants Association.

Writings

"Strategic Environmental Management / Top 100 Eco Design Practices" (Coauthor / Diamond Inc.), "Eco Design" (Coauthor / University of Tokyo Press), etc. Contributes to the "Japanese Design Report" in COMZINE (a web magazine by NTT Comware).

www.openhouse.co.jp/ / www.zokei.ac.jp
<http://www.nttcom.co.jp/comzine/new/jdesign/index.html>
<http://www.desis-network.org/>
As of July 1, 2013

①山口県楠クリーン村のエネルギー源は手作りのソーラーパネル。

These handmade solar panels act as an energy source for Kusunoki Clean Village in Yamaguchi Prefecture.

②耕作放棄されていたお茶畑を3年がかりで再生し、オリジナルブランドで出荷している。

This abandoned tea field was brought back to life in 3 years time, with the resulting product shipped as an original brand.

③経営難で閉鎖された牧場から救出した牛が仔を生んで増えている。

Cattle saved from a farm, shut down due to financial issues, are birthing calves and increasing in number.

④東京造形大生によってセルフビルドされるオープンハウス新社屋。

The open house new company building, built by students from Tokyo Zokei University.

⑤株式会社オープンハウスは

東京都港区からここへ本社を移転中。open house inc. is moving their headquarters here from Tokyo's Minato Ward.

⑥カンボジアココン州バンガチャーンでの貝殻を使ったワークショップ。

A workshop using shells in Boeng Kachang, Koh Kong Province, Cambodia.



なバイオマス資源に恵まれている以外、鉱物もなく食料自給率もカロリーベースで40%しかなく、エネルギー自給率に限ってはたったの4%です。こんな貧しい国で、たまたま加工製品を販売してお金が得られたから今のような先進国に成長しました。でも、実は脆弱なインフラの上にあぐらをかいていたのです。

ヨーロッパからサステナビリティを学びましたが、彼らのサステナビリティには矛盾がありました。世界の資源・エネルギー消費は地球の供給限界を完璧にオーバーフローしているにもかかわらず、彼らの一人当たりのエネルギー消費は圧倒的に多い。そして、リサイクルにはじまり、原発から自然エネルギーへの転換などやれることは徹底して行いますが、決して今の水準を手放そうとしません。いわゆる環境優良国はみんなそうです。

先進国は世界人口の約2割しかないというのに、世界のエネルギーの8割を独占しています。そして約8割の人々が、残りの2割の資源を分けあっています。その中には、中国やインドなどの新興国も含まれています。もはやエネルギーに関しては伸び代がない中、これから先、日本が幸せな国でありつづけることにはどうすればいいのかが重要だと思っています。

サステナブルとは次代への継承
後世に残すべきものは

サステナブルデザイン国際会議は期限を設けています。だから、その期限である2016年までに、少なくとも可能性を見出しおかなければなりません。最近ようやくその手がかりが見えてきました。

もともとサステナビリティというのはヨーロッパの概念では持続ですが、もはや持続すること自体、ストレスになっています。しかし、最近、一つの文明が減んだ時に、後世に何を残していけるのかが、サステナブルではないかと気づいたのです。

伝えるべきバトンを渡すにあたって何を残せるかを精査しないといけない。現代文明を持続するのではなく、次の文明へうまく橋渡しするのがサステナブルということ。

何を残していくか。教育も教師の今までの経験や規範を押し付けるのはだめ。この文明、続いていようと100年。今あるものの中から何か選んでもらえるように準備を進めているところです。

動き出す

自給自足の暮らしへ

実は今、若者たちと一緒に山口県楠という場所で、実験的な村を作っ

ています。そこではインフラを切断して、電力会社から電力を買わず、水道も引かず手作り家で家を建て、牛を飼い、農を中心とした六次産業化を目指して暮らしています。エネルギーをはじめ可能な限り自給しつつも最新技術を活用するところが、かつてのヒッピーとは異なります。私の事務所もそこに移転します。

それには別の目論見もあります。デザイナーという職業ができて、まだ50年くらいです。その50年間でデザインという職能をデザイナーが独占してしまいました。

もともと日本には独自のデザインの歴史がありました。クラフトもアノニマスですが、世界最高のものがありました。そのポテンシャルが職人になりました。職人であらずとも、料理の盛り付け一つみても、とても見事なものでした。

そのデザイン能力をみんなが持っているのに、いつの間にかデザインが専門化してしまったのはまずい。デザインの民主化を進めていかなければならないと思っています。

専門教育を受けていなくても、自分でデザインができるよう支援したい。デザイン職能の解体と民主化というシナリオです。